

# 保険・年金 フォーカス

## アジア生命保険市場の動向・ 展望と重要点

保険研究部 兼 経済研究部 主席研究員アジア部長 平賀 富一  
新潟大学大学院教授(国際競争戦略論等担当)  
(03)3512-1822 hiraga@nli-research.co.jp

### はじめに

本稿では、最初に、2015年のアジア生保市場の動向を概観し、次いで同市場の中長期の展望と重要点について述べる。以下では、アジア生保市場として、NIES4（韓国・香港・台湾・シンガポールの「先進アジア」：Advanced Asia）、とそれ以外の「新興アジア」（Emerging Asia）を必要に応じて区分して論じている。新興アジアには、ASEAN（東南アジア諸国連合）諸国（特に、マレーシア・タイ・インドネシア・フィリピン・ベトナムを「ASEAN5」と総称）と中国、インド、その他のアジア諸国が含まれる。

なお、中国、韓国、インド、シンガポール、ベトナムの生保市場動向の詳細については、弊研究所の研究員による各国別のレポートを参照いただきたい。

### 1— 2015年のアジア生保市場の動向

図表-1 アジア主要国・地域の経済・生保の主要指標（2015年）

	人口 (万人)	名目GDP (10億ドル)	一人当たりGDP (ドル)	実質GDP 成長率 (2013-15年、 年平均伸び 率、%)	生保収入保険料				一人当たり保険料 (ドル)	保険料/GDP (%)
					米ドルベース			現地通貨ベース		
					百万ドル	対前年増減%	対前年増減(実質%)	対前年増減(名目%)		
韓国	5,063	1,376	27,195	2.9	98,218	-2.9	5.2	6.0	1,940	7.3
香港	731	310	42,930	2.7	41,255	11.9	8.6	11.9	5,655	13.3
台湾	2,349	524	22,288	2.3	79,627	0.6	6.0	5.7	3,397	15.7
シンガポール	524	293	52,888	3.3	16,258	0.4	9.5	8.9	2,932	5.6
NIES4国・地域計	8,667	2,503	28,880		235,358	-0.4			2,716	9.4
マレーシア	3,100	296	9,557	5.2	9,588	-12.9	2.7	5.7	316	3.4
タイ	6,884	395	5,742	2.1	14,619	1.0	7.5	6.5	215	3.7
インドネシア	25,546	859	3,362	5.1	11,013	3.1	9.5	16.5	43	1.3
フィリピン	10,215	292	2,858	6.3	4,010	15.9	17.1	18.8	40	1.4
ベトナム	9,168	191	2,088	6.0	1,583	18.3	21.2	22.3	17	0.8
ASEAN5計	54,913	2,033	3,702		40,813	-0.4			74	2.0
中国	137,462	10,983	7,990	7.3	210,763	19.1	19.7	21.5	153	2.0
インド	129,271	2,091	1,617	7.0	56,675	5.6	7.8	13.1	43	2.7
アジア11計	330,313	17,610	5,331		543,609	7.0			165	3.1
(参考)日本	12,693	4,123	32,486	0.6	343,816	-5.7	2.8	3.0	2,717	8.3

(資料) 保険関連データはスイス再保険会社「Sigma No3/2016」、その他はIMF「World Economic Outlook Database, April 2016」により筆者作成

2015年のアジアの生保市場(図表-1の「アジア11計」)の生命保険料収入(米ドルベース)は、日本の約1.6倍に相当する5,346億ドルで、その対前年増収率は7.0%であった。為替レートの変動の影響がなく個別各市場の実勢をより把握できる現地通貨ベースの増収率を用いてその動向をみると、以下のポイントが指摘できる。

(1)先進アジア(NIEs4):中国本土からの契約者が保険料の増収に寄与(新規契約保険料の内24%を中国本土の契約者が占めた)というプラス要因も加わった香港の対前年11.9%増を筆頭に、その他3国・地域も5-8%台の堅調な伸び率を記録した。経済発展レベルが高水準に達する中、生命保険の普及度は、すでに世界的に高い水準に達している。すなわち、①一人当たり生命保険料について、香港が世界首位、台湾が6位、9位シンガポール、韓国14位(日本10位)<sup>1</sup>、また、②GDP対比の生命保険料では、台湾が世界首位、香港が2位、韓国が7位(日本5位)<sup>2</sup>となっている。このように相当に成熟したレベルの生保市場となっているが、各商品セグメントは堅調な伸びを示している。その大きな要因は、高齢化が進む中で年金など退職準備関連商品、医療保険への関心が増していること。所得水準の高まりの中で、貯蓄・投資型商品へのニーズが強いことが挙げられよう。

(2)新興アジア(ASEAN5と中国・インドを中心に記述):対前年5-6%台の堅調な伸びであったマレーシアとタイを除く諸国は、対前年二ケタの高い増収率を記録した。普及度は、ASEAN5で、一人当たり生命保険料が74ドル、GDP対比の生命保険料が2.0%、中国とインドがそれぞれ、153ドルと2.0%、43ドルと2.7%と未だ低水準にある。

以下の要因から、貯蓄・投資型商品および保障商品の双方の販売が伸びており、この傾向は当面継続するものと予測される。

- ①経済発展の進行により、中間層の増加傾向が続き人々の購買力が増している。
- ②若年人口が多く人口ボーナス期が長く続く国が多い。
- ③都市化による生活スタイルの近代化・生活レベルの向上と核家族化の進行。
- ④保険への認識や理解度・知識が未だ低く、生命保険の普及度が低いことによる大きな成長可能性。
- ⑤マレーシアなど新興アジア地域の中でもより先進的な市場では、各人が必要な保障額と実際の保障額のギャップへの注目度が上がり、保障金額の引き上げについての関心が高まりつつある。
- ⑥販売網の拡充・多様化(エージェントのレベルアップ、バンカシュアランスの増、電話・インターネットなどを通じた販売の増加)
- ⑦低所得者層向けのマイクロ保険の販売増。
- ⑧マレーシアやインドネシアでは、イスラム保険(タカフル)の一層の伸びが予測される。

なお、先進アジアおよび新興アジアの双方において、市場の成長への大きなリスクは、先進国経済や中国経済など世界経済の低迷や景気後退と、低金利環境であると考えられる。

<sup>1</sup> その他の上位国は、2位スイス、3位フィンランド、4位ルクセンブルグ、5位デンマーク、7位英国、8位アイルランド。

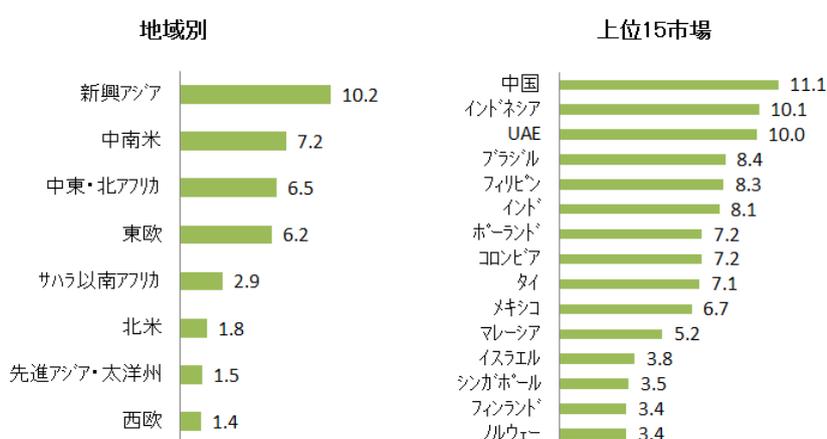
<sup>2</sup> その他の上位国は、3位南アフリカ、4位フィンランド、6位英国となっている。

## 2—アジア生保市場の中長期展望

同地域において中長期的に一層の経済発展が見込まれる中、諸機関による予測でも一層の生保市場の拡大が見込まれている。この点に関し、2016年5月公表されたミュンヘン再保険の『Insurance Market Outlook』では、2016年から2025年までの予測が示されており、以下では、その要点を紹介する。

第一に、2016年から2025年の期間の生命保険料増収額の5割を新興国市場が占めるとされる。その太宗を占める新興アジアは、図表-2に示されるように、この期間の保険料増収率の年率平均(CAGR)が10.2%と最も高成長が見込まれている。国別の保険料増収率(年率平均)のランキングでは、中国が11.1%と全体のトップ、2位がインドネシア(10.1%)、さらに、フィリピン(8.3%)、インド(8.1%)、タイ(7.1%)、マレーシア(5.2%)、シンガポール(3.5%)とアジアから7か国がベストテン入りしている。

図表-2 2016-2025年の期間における生命保険料の増収率(年平均%)



出所:ミュンヘン再保険『Insurance Market Outlook』(2016年5月公表)をもとに筆者作成

## 3—アジア生保市場における重要点

### (1) 保険に関する意識・ニーズの高まり

上述のとおり、各国・地域における経済成長下での富裕層・中間層の増加と都市化の進行によって、生活水準が向上し、生活スタイルが変化・近代化することにより、保険に対する意識や関心とニーズがさらに高まるものと考えられる。その結果、生活防衛のための保障性商品へのニーズの増加、資産運用ニーズ対応としての貯蓄・投資型商品の重要度の双方の増加が予測される。特に、①高齢化への関心が高まる先進アジアとタイ・マレーシア、中国等では、年金など退職準備商品と医療・介護保険へのニーズが強まるものと予想される。②新興アジアにおいては、未だ低水準の保険普及率ゆえに今後の増収余地と可能性がより大きいと考えられる<sup>3</sup>。

### (2) 法規制の整備や監督水準の高度化

各国において法規制の整備や監督水準の高度化がさらに進行するものとみられる、保険会社の体力・体質

<sup>3</sup> インドネシアなど新興諸国の多くで急速に普及している SNS も含めたデジタル技術の普及(詳細を後述)は、保険知識の普及、ニーズ喚起と販売にも大きな効果を発揮する可能性があると考えられる。

の強化と消費者保護が重要なポイントになるだろうが、特に、先進アジアにおいてはリスク管理や欧米日とも整合した資本・ソルベンシー規制の整備、コーポレート・ガバナンスの強化、新興アジアでは、資本力の強化、商品・販売の適正化に関するものが中心となるだろう。後述のデジタル化に関連する個人情報データの保護は、先進アジア、新興アジアの双方にとって重要な事項になるだろう。

### (3) M&Aも含めた市場への参入・事業の拡大等

各市場の拡大と、アセアン経済共同体(AEC)など市場統合の動きが進む中、M&A手法も含め、新規市場への参入や、既参入市場で事業規模の拡大を図る企業の増加が続く可能性が大きい。そこでは、欧米日の企業のみならず、自国市場で力をつけたアジアの有力保険企業も他市場への参入も増加するものと考えられる。その一方で、競争力や収益力が不十分な企業の撤退・淘汰や、収益期待がより大きい域内の他市場へ経営資源を移転・注力する動きも予測しうる。

### (4) 保険産業全般に影響を与えるデジタル化の進展

最近の保険業界における最大の関心テーマは、保険テクノロジー(Insurtech)ともいわれるデジタル化であろう。保険業は、各産業界の中でもデジタル技術の活用が遅れている業界の一つとの評価もある中、アジアの保険市場においても、IoT、Industry4.0といった進化の中で、IT技術、医療技術、AI(人口知能)、ビッグデータなどの有機的な活用が大きな話題となっている。デジタル技術の進化は、保険の引受、販売、商品、マーケティング、保険金の支払い、事務処理などの各プロセスと機能、顧客・消費者との関係性を含めた経営全般に大きな変化をもたらす可能性があるといわれている。その中で、アジア地域においても生命保険会社で専任の部署を設け検討・対応を進める事例<sup>4</sup>が出ている(例えば、米MetLifeによるシンガポールのイノベーション・センターの開設)。また、中国では、最有力IT企業であるアリババグループなどによる保険業や健康産業への参入や保険・医療関連アプリの開発・提供の動きが始まっている(詳しくは、片山ゆき「Fintech(フィンテック)100、1位の衆安保険を知っていますか?」『保険・年金フォーカス』2016年6月21日、ニッセイ基礎研究所を参照)。さらに、時計や眼鏡といったウェアラブル端末を活用した、顧客とのコミュニケーションの増加や、保険・医療に関する照会・応答、健康面のアドバイスや健診数値の改善による保険料の割引などに関するスマートフォンやパソコンのアプリの提供が行われる事例も増加している。また、新興国であるインドネシアで、人口2.5億人に対し6千万人もの人がフェイスブック(SNS)を利用している事例や、中国で、1999年創業のアリババグループの電子商取引企業(天猫)等が、実店舗の大手企業(国美電器・蘇寧電気など)の売上げを凌駕し、小売り業態の構造を革命的に変化させた事例<sup>5</sup>などは保険業界においても重要な参考になるものと考えられる<sup>6</sup>。さらに新興国の有する「後発性の利益」により、先進諸国よりも新技術を導入・普及させやすいというアドバンテージもありうる。この観点で、先進国の企業が、アジア地域の子会社でのイノベーションを本国に逆輸入するというケースも生じうると思われる。

<sup>4</sup> スイス再保険『sigma No.6/2015』2ページ参照。

<sup>5</sup> このような事例ではIT企業など他業界から専門人材を招くケースも散見される。

<sup>6</sup> 2015年の中国での売上げ規模は6,720億ドルと日本の896億ドルの約7.5倍になっている

<sup>7</sup> 日本の状況を考えても、Windows 95の登場により、パソコンが企業や家庭で本格的に使われ始めて20年、また2007年の初代iPhoneの販売から10年足らずで、社会の在り方や個人の生活スタイルが大きく変化しており、これから10年以内には現在予想もつかない大きな変化が起きる可能性があるという推量される。

今や、IT 技術の進歩やインターネット接続、SNS の普及により、消費者が中心となった新たなエコシステム（関連する企業や関係者が有機的に結びつき共存共栄する仕組み）が構築され、既存の産業の構造や在り方が変化しつつある。デジタル化への対応は、単にアジア地域に限らず、保険産業・企業が、新たなエコシステムの中で、IT 企業や医療関連企業や当該人材と協働・提携しつつ、どのような付加価値を提供し重要なポジションを確保できるかという経営課題への対応として最重要なものとなっていると考えられる。

#### 〈主要参考文献〉

- ・片山ゆき「[Fintech \(フィンテック\) 100、1位の衆安保険を知っていますか?](#)」『[保険・年金フォーカス](#)』2016年6月21日、ニッセイ基礎研究所。
- ・経済産業省商務情報政策局情報経済課『平成 27 年度我が国経済社会の情報化・サービス化に係る基盤整備（電子商取引に関する市場調査）報告書』2016年6月。
- ・スイス再保険「Life Insurance in the Digital Age: fundamental transformation ahead」『Sigma No. 6/2015』.
- ・同上「World Insurance in 2015: Steady Growth amid Regional Disparities」『SigmaNo. 3/2016』.
- ・ミュンヘン再保険『Insurance Market Outlook』（2016年5月）
- ・Ernst & Young『2016 EY Asia-Pacific Insurance Outlook』